# 『甲子園という病』

氏原英明[著]、新潮社、2018年

［評者］
佐藤瑛祐
SATO Eisuke

本書は、スポーツジャーナリストとして15年間高校野球を取材してきた氏原英明氏が、その経験をもとにソーシャルネットワーク型オンライン経済メディア「News Picks」での連載をベースとして記したルポタージュである。本書は大きく分けて「投手の登板過多を始めとした高校野球の問題とその原因」と、「そうした問題に対する改善策の提案」というふたつのパートで構成されている。

本書が発行された2018年に夏の甲子園は記念すべき第100回大会を迎えた。この100年で甲子園では数え切れないほどの感動のドラマが生まれ、それは多くの人の心を動かし、熱狂させてきた。その一方で、著者いわく、その裏側には普段中々光が当たらない「不都合な真実」が数多く存在しており、それらは今や無視できないほど大きな問題となっているという。しかしながら、「高校野球の報道にあるのは常に『感動』」であり、選手たちが身体を犠牲にしながらプレーする姿を「“甲子園メディア“は……『感動ストーリー』として書き立てる」のである。

本書はそうした状況を「甲子園中毒」と称し、従来の甲子園のあり方について深く踏み込んでいる。とはいえ、本書は甲子園の存在そのものを否定しているわけではない。著者自身もこれまで甲子園に魅了されてきた1人であり、「甲子園は目指す価値のある舞台だ」と述べている。ただ、それはメジャーリーグ（以下MLB）のスカウトから「児童虐待」と揶揄されるような過酷な舞台としてではなく、高校球児の成長とスポーツの楽しみを体現する場としてである。

著者は現在の高校野球について、「勝利至上主義」が蔓延しているとし、その大きな原因は指導者の「心の奥に潜む『勝ちたい』エゴ」だと述べる。つまり、表面上は「選手を勝たせたい」と言いつつも、その根底には「自らが勝ちたい、恥をかきたくない」という気持ちがあるということだ。他方で、著者は勝利至上主義とは別に、練習試合でも「エースを出さないのは失礼だ」という空気感が高校野球界全体にあり、その結果ひとりの投手が酷使されている現状があると指摘する。

また、著者は登板過多の原因として高校野球の年間スケジュールと大会の方式にも問題があると述べる。まず前者に関しては、夏の大会が終わるとすぐに春の選抜甲子園の「選考大会」の役割を担う秋季大会が始まるということである。そのため、新チームに移行して試行錯誤をしていくべき段階でもう「負けられない戦い」が始まってしまう。チームが未完成な状態にあって、仮に圧倒的な実力を持つ投手がいれば、「その存在に頼ってしまうのは当然」なのである。また後者に関しては「高校野球の多くの大会がトーナメントで行われている」という問題である。一発勝負は戦術における様々な手法を生み出す反面、負けられないということによって「作戦面はより確実な方を選択」していくことになる。つまり、投手起用においても「ギャンブルを打てなくなる」ため、複数の投手を育てることは容易ではないのである。

今日の高校野球では、甲子園に出て活躍することや優勝することの意味があまりに大きくなり過ぎてしまったために、目先の勝利を優先する指導や選手起用が当たり前になった。そしてそれによって、「プレイヤーズ・ファースト」という理念が明確に欠如している。本書の中心的な主張はこのように要約することができるだろう。

本書がユニークなのは松坂大輔（元西武ライオンズ）と黒田博樹（元広島東洋カープ）のキャリアを比較している点である。横浜高校のエースとして甲子園春夏連覇を果たした松坂に対して、上宮高校時代は3番手投手だった黒田は、監督からの評価は決して高くなく甲子園のマウンドに立つこともなかった。松坂は高卒でドラフト1位として西武ライオンズに入団し、ルーキーイヤーからいきなり3年連続で最多勝利のタイトルを受賞し、8年間で108勝をあげる活躍を見せた。一方で、黒田は高校卒業後、専修大学を経てプロ入りし、11年で103勝を挙げた。ここまでを見たうえで、あえて両者のキャリアに優劣をつけるのであれば、松坂に軍配が上がるだろう。

しかし、事態は両者がMLBに移籍したあたりから急変する。松坂は2007年に移籍すると、1年目に15勝、2年目に18勝を挙げたものの、その後はケガもあり一度も二桁勝利を挙げることができず、結局MLB在籍8年間で56勝しか挙げることができなかった。そんな松坂とは対照的に、黒田は2008年にMLBに移籍すると7年間で二桁勝利を5度達成し、通算79勝を挙げる活躍を見せた。しかも、松坂が27歳のシーズンで移籍したのに対して、黒田が移籍したのは33 歳のシーズンである。つまり、黒田は以来7年間、39歳までチームの中心選手としてMLBの舞台で活躍したのである。

こうした両者のキャリアを比較したうえで、著者は松坂が甲子園優勝という目標を掲げ、高校時代に隙のない「完成品」になってしまったが故に、

高校時代はもとよりプロでも早くから活躍して、登板を重ねてしまったと述べる。著者はこの松坂の事例から見つめるべき問題点として「目標設定」を取り上げる。つまり、「甲子園で優勝するための完璧すぎる投手」という「目標設定」が、結果として松坂の選手としての寿命を縮めてしまったということだ。そして、この問題は単に松坂の例に限定される話ではない。甲子園に出ることや優勝することといった「短期的な目標設定」によって、目先の勝利が優先され、結果として「プレイヤーズ・ファースト」の欠如という事態に陥るのである。

とはいえ、松坂と黒田のどちらがより成功したかという優劣をつけるのは難しい。というのも、MLBでの実績を比較すると著者の指摘通りだが、松坂は日本で黒田よりも数多くのタイトルを受賞しており、先発投手最高の栄誉とされる沢村賞も受賞しているからだ。しかし、著者は両者に優劣をつけることの難しさを理解した上で、さらに興味深い意見を述べている。

それは「彼の持っていた才能が『メジャーリーグ最高のピッチャーに与えられるサイ・ヤング賞を何度も獲れるほどのもの』だったとしたら……『甲子園優勝』という短期的な目標設定は、良かったのか」というものである。甲子園出場や優勝といった短期的な目標設定はあるべきだが、それと同時に、球児達の将来も見据えた長期目標を持たせることも同等以上に必要なのである。

本書ではこうした目標設定の問題に関して、さらにいくつかの観点から考察を進めている。ここで仔細に述べることはできないが、例えば筆者は、2014年に選抜初出場を決め、同時にある国家資格の合格者数で「日本一」に輝いた沖縄県立美里工業高校や、文武両道を体現した安田尚憲（現千葉ロッテマリーンズ）と根尾昂（現中日ドラゴンズ）の例を取り上げて、選手育成について考えている。

勿論、こうした事例に対して述べられている著者の主張や今後の球界への提案に対して疑問を投げかけることもできる。しかし、本書において、著者はあくまで高校野球の問題について、自身の取材をもとに多角的かつ詳細に記すことで読者が「甲子園中毒」という病から覚めるきっかけを作りたかったのだと思われるし、その点においては成功していると言える。

2021年度の春の選抜甲子園から「同一投手の投球数を1週間で500球以内」とするルールが設けられた他、一部では「Liga Futura」という高校野球のリーグ戦を展開する試みも見られる。こうした動きを始め、今後球界全体が高校野球改革に臨むのであれば、本書が書かれた意味は十分にあったと言えるのではないだろうか。



Beyond Boundaries: Comparative Civilizations Now 22 (Feb. 2022)
Copyright © The Comparative Civilizations Society of Rikkyo University